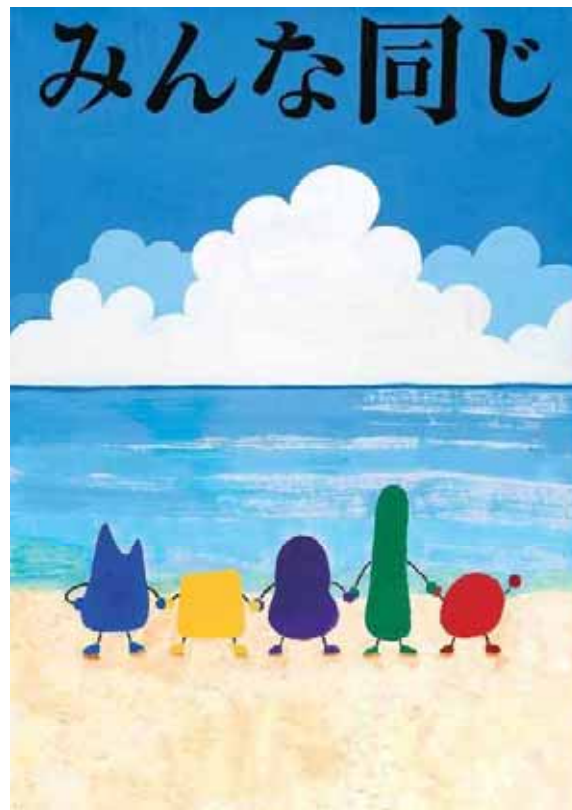


2011年度人権作品集



(「人権」に関するポスター選定作品 中学生の部 3年生)



(「人権」に関するポスター選定作品 小学生の部 5年生)

はじめに

名張市・名張市教育委員会では、日常のさまざまな生活場面での体験を通して、人権を守ることの重要性や、部落差別をはじめ、あらゆる差別をなくすための意見を市民のみなさんから募集しています。

本年度も、小・中学校の児童生徒をはじめ、高校生・一般のみなさんから、「人権」に関する作文・標語・ポスター（図画）・フォト（写真）を合わせて七七四点ものご応募をいただきました。

全体を通して見てみると、自分たちの身近な問題や、さまざまな体験を通して、人権の大切さをとらえ、自分たちの生活の中で差別をなくしていく行動に移していこうとする気持ちが現れています。日ごろの学校、地域等での人権・同和教育の取り組みの成果だと喜んでいきます。

この作品集には、ご応募いただいた作品の中から、作文十二点、標語十九点、フォト（写真）五点を掲載しました。

作文・標語は、様々な学習や日ごろの自分自身の体験を通して、差別の現実に触れ、その中から差別をなくすために、自分の問題として自分がどう行動すべきかなどが率直に表現されているものが多く見られました。

なお、ポスター（図画）については、二作品を啓発用のポスター及びティッシュとして活用し、標語については、二作品を啓発用ティッシュに活用します。

この作品集を通して、人権問題に関するさまざまな意見や考えにふれ、人権問題が生活に密着した問題だと実感していただくとともに、さまざまな学習の場でお使いいただくことで、人権意識の高揚と差別のない明るく住みよい社会の実現にお役立ただければ幸いです。

最後になりましたが、作文・標語・ポスター（図画）・フォト（写真）にご応募いただきましたみなさま、並びに、応募作品の取りまとめや審査にご協力をいただきましたみなさまに厚くお礼申し上げます。

目次

作文

〈小学生の部〉

わたし

(二年生) 4

「あつたかことば」をいっぱいつかおう

(二年生) 5

わたしのゆめ

(三年生) 6

わたしの大切な友達

(四年生) 7

大切な命

(五年生) 8

自分を見つめて . . .

(五年生) 9

ぼくにできること

(五年生) 10

もう絶対にしない

(六年生) 11

〈中学生の部〉

「違い」を認め合うこと

(一年生) 13

膝サポーターが教えてくれたこと

(三年生) 15

△高校生・高等専門学校生・一般の部▽

「知る」ということ

(高校三年生) 17

人権

(高等専門学校一年生) 19

標語

小学生の部 20

中学生の部 20

高校生・高等専門学校生・一般の部 20

フォト(写真)

いつまでも 21

大切な仲間 22

二人の世界 23

魅!! 22

団結の力 21

わたし

(小学二年生)

パパはエジプト人だけど、わたしとおにいちゃんともうこのために、できることはがんばってくれるし、木でおもちややひこづきを作ってくれます。今も大切にしてくわさないようにして、家においでいます。

パパは野さいをうえるのがじょうずです。野さいの土にはいろいろな虫がいつばいいて、とくに多いのはミミズです。パパのそだてた野さいを食べると、とってもおいしいです。サラダとかやきめしとかたくさん野さいを入れて、りょうりしてくれます。パパのつくったごはんを食べると、おなかがいっぱいになります。一学きに、パパは学校へ来てみんなにエジプトの話をしてくださいました。歌をつたうラクダのおもちやを見せたり、エジプトのおやつをみんなに食べさせてくれたりしました。パパは家で、話をしたのしかったと言っていました。わたしもうれしかったです。また来てエジプトのことを教えてほしいと思います。

パパが友だちのお父さんとくらべてかわっているところは、お肉を食べないところです。パパのかみさまは「ぶた肉を食べたらびょう気になる」といってそつです。牛のお肉も食べません。でも、とり肉は食べます。だから、家でのごはんは、お肉は食べ

ません。わたしはふしぎだなと思っていました。でも、いろいろな考え方があのだなと思います。

わたしの名前はカタカナで長いです。みんなは、みょうじや名前が少ないのに、わたしだけなぜ長いのかなと思います。プリントに名前を書くときに、書くところがせまいと書きにくいです。でもわたしは、この名前がすきです。

わたしのかみの毛はくるくるでなつはあついけど、冬になるとわたしのかみの毛はやくにたちます。ふわふわだからとってもあたたかいです。気もちいいです。

わたしは、みんなといっしょではなくて、顔の色がちゃ色なのでちがいます。でも、お母さんは、わたしの顔の色がちゃ色でとってもかわいいと言ってくれるので、うれしいです。

学校では、休み時間が一ばんたのしいです。いつも、クラスの友だちとあそんでいます。ライオンごっこをしたりおにごっこをしたりしています。ほつかごは、ほかの学年の子ともあそびます。外であそぶのが、一ばんたのしいです。みんな、なかよしです。

わたしは、エジプトに行ってみたいと思います。いろいろなことを知りたいです。ピラミッドやミイラを見てみたいと思います。せかい中の人とお友だちになりたいです。

「あつたかことば」をいっぱいいつかおう

(小学二年生)

学校のどつとくの時間に「チクチクことば」と「あつたかことば」というべん強をして、みんなでじ分たちのことを考えました。

「チクチクことば」は、人に言われていやな気もちになることばのことで、人のことをばかにし、人の心をきずつけることばです。「あほ」「ばか」「しね」と言ったり、せのひくい子に「ちっちゃいな」と言つてからかつたりすることです。じ分の名前をかえておもしろ半分ではかれることも「チクチクことば」「だ」という子もいました。

「あつたかことば」は、人をうれしい気もちにさせることばのことです。「ありがとう」「や」「大じょうぶ」と心ばいすることば、「じょうずやなあ」ということばなどが「あつたかことば」です。

わたしが一年生のとき、体育の時間にこんなできごとがありました。

てつぼうの前回りができなかつたとき、友だちが、

「できひんの。」

と言つてきました。

わたしは、ばかにされたみたいで、ちよつとかなしくなつてきました。今、思うと、「これが「チクチクことば」なんだなと思います。

わたしは、かなしくて、少しくやしかつたので、一人で前回のれんしゅうをしました。いっぱいれんしゅうしました。すると、てつぼうにのつて、下をむけるようになりました。もう少しでできそ

うになりました。そのとき友だちが、

「いっしょにれんしゅうしよう。」と言つてくれました。わたしは、とてもうれしい気もちになりました。がんばろうという気もちになりました。この「いっしょにしよう。」というさそつてくれることばも「あつたかことば」だなと思いました。

つぎの体育のときにも、前いっしょにれんしゅうしてくれた友だちが、

「がんばれ。」

「あとちよつと。」

と言つておうえんしてくれました。「あつたかことば」をもらつと、とてもうれしいです。

二年生になつて、れんしゅうをつづけて前回りができるようになりました。「あつたかことば」のおかげかなと思いました。

休み時間に「りん車をしていると、

「じょうずやなあ。」

「すごいな。」

と、言つてくれる友だちがいます。とても、うれしいです。手をはなして「りん車」にのれるようになることがわたしの目ひょうです。友だちの「あつたかことば」を聞くと、やる気ができてきて、できそうな気がしてきます。手をはなして「りん車」にのつて、みんなと楽しくあそべたらいいなと思つています。

わたしも、これからは、人をうれしい気もちにし、みんなで楽しくなれるように「あつたかことば」をいっぱいいつかしていきます。

わたしのゆめ

(小学三年生)

わたしは食物アレルギーで、今、玉子を食べる練習をしています。アレルギーがなおったら、玉子かけごはんが食べたいです。ときどき妹が食べているのを見てみると、とてもおいしそうだからです。わたしが小さいころ、おじいちゃんやわたしはわたしが「まんご」が好きな事を知っていて、「まんご」プリンを買ってきてくれました。わたしはよるこんで「まんご」プリンを食べたようです。すると、みるみるうちに顔が赤くなってはれてきて、すぐに病院に行きました。おじいちゃんもお母さんも夜中じゅうずっと心配してそばにいてくれた事を聞いて、わたしはしあわせだなあと思いました。

今わたしは、一ヶ月に一回、病院でちりょうをつけています。うすやき玉子なら、玉子一こ分食べられるようになりました。「これで一歩ゆめに近づいた。玉子かけごはんやオムライスが食べられるようになる日がそのうちくるかも。」と、とび上がるほどうれしかったです。

きゅう食でも食べられない物があります。そのために、調理員さんと保けんの先生とお母さんとで、きゅう食メニューの打ち合わせをしています。たとえばかき玉汁であれば、わたしのために玉子ぬきのとくべつメニューを作ってくれます。一人分だけべつに作るのはめんどくさいと思うけど、わたしのために作ってくれてありがたいなあと思います。ししゃもフライの時は、お母さんが家でさけフ

ライを作って、きゅう食に間に合うように持って来てくれます。黒とうパンにも玉子が入っていて今は食べられないので、かわりにごはんを持って来てくれます。そのごはんがいつも、トトロやくまの形でのりやチーズでかわいくかざってくれてあります。きつとみんなと同じメニューが食べられないわたしがくやししい思いをしないように、心をこめて作ってくれていると思います。調理員さんにもお母さんにも「ありがとう」という気持ちはいっぱいあるけど、やってもらつて当たり前になつているので「ありがとう」とはあまり言えていません。だから、これからは「いつもありがとう」と言葉で伝えていきたいと思えます。

クラスのみんなは、わたしにアレルギーがある事をよく分かっていて、きゅう食当番になつた時、気をつけてくれます。そんなみんなの気もちがうれしいです。

わたしのゆめは、玉子アレルギーや、小麦アレルギーの子どももおいしく食べられるケ「キヤさんになる事です。なぜケ「キヤさんになりたいかというと、わたしみたいにアレルギーの子は、おいしそうなケ「キを見ても買う事ができません。わたしがケ「キを食べられるのは、お母さんの手作りか注文です。玉子なしのケ「キヤさんが少ないので、玉子なしのケ「キヤさんをさがすのも、大へんだそうです。わたしは、今つらい思いをしているので、アレルギーのある子もなるべくつらい思いをしなくていいように、玉子や小麦なしのケ「キヤさんになりたいです。

わたしの大切な友達

(小学四年生)

わたしの友達には、耳と口の不自由な友達がいます。そのAちゃんも、いつも元気にわたしとミニバスケットをしています。そのAちゃんは、せも低く体も小さいです。けれど、Aちゃんは、走る時だれよりも速く走れるようにがんばっています。「コ」チにおこられた時も、決して泣かずにがんばることが出来ます。練習で「コ」チが声を出そうと言った時、Aちゃんは「ウーウー。」とできるかぎりの声を出しています。Aちゃんはいつも一生けん命です。

Aちゃんはいつもわたしに手話で話しかけてくれました。でも、手話が分からなかったので、Aちゃんのお母さんに教えてもらいました。Aちゃんももっといろんなことを話すために、今手話の勉強をしています。Aちゃんと手話で話すのは、楽しいです。時々どきわたしとAちゃんが手話で話している時笑われることがあります。そんな時わたしは体が熱くなってきびしく相手に言ってしまうことがあります。でも、Aちゃんは、「気にしないでいい」と言ってくれます。心の中ではわたしといっしょで、いやな気持ちにならっていると思うのに、いつもニコニコ笑顔で元気いっぱい。悲しい顔、苦しい顔はみんなに見せません。

夏休みに「点子ちゃん」という、目が不自由な子の話を読みました。Aちゃんのことを思い出しながら読んだあと、じっと目をつぶってみました。目をつぶっているだけで、とてもこわい気

持ちになりました。そして、そのまま道路の音を聞いてみました。車とバイクの音はほとんど同じで、トラックにもなっていました。救急車は、音が鳴る時と鳴らない時があります。鳴っている時は分かるけど、鳴っていないときは、トラックと同じぐらい分かりませんでした。

次に家の中で家族の足音を聞いてみました。お父さんの音は大きい音で、お母さんの音はお父さんのより少し小さい音でした。お兄ちゃん二人はほとんど同じ音でした。

わたしは目をつぶって耳をすましてみても、それぞれ歩く音がみんなちがう事を初めて知りました。目が見えない人は、毎日何人もの足音を聞いてだれの足音か、何の音かを聞き分けて生活しているんだとわかって、すごいと思いました。そしてそれを毎日ずっと続けているのだと考えると、Aちゃんはすぐくがんばっているんだと思いました。

Aちゃんはわたしとちがって心が強いです。わたしだったら友達をうらやましく思って泣いていたかもしれませぬ。

でも、Aちゃんと友達になってから、わたしはもっと強い人になってAちゃんやバスケットのみんな、クラスのみんなを守ってあげられる人になりたいと思うようになりました。

まず今のわたしにできることは、ミニバスケットのみんなに手話を教えてあげることだと思います。そしてAちゃんと仲よくなつてほしいです。みんなが、心からかわり合つて、つながっていききたいです。

大切な命

(小学五年生)

わたしの祖父は、今、病気でねこんでいます。病気を治そう
と思い、「ご飯をしっかりと食べたり、体調の良い日には、外へ出
たりしていましたが、足がいたくなったり胃がいたくなったりし
て、歩けなくなっていました。

母は、祖父のために「ご飯を食べさせてあげたりしています。わ
たしも病気が早く治ってほしいと思っています。

わたしは、学校から帰ってくるためとまず祖父に
「ただいま。」

と言います。すると祖父は、にっこり笑って

「おかえり。」

と言ってくれます。わたしは、その時祖父の元気な声が聞けてう
れしくなります。

祖父は、幼稚園のバスの運転手をしていました。錦生小学校に
は、祖父の事を知ってくださっている先生方がいて

「おじいちゃんの場合はどう？」

と心配してたずねてくれる時があり、そのことを祖父にも伝えて
います。祖父は、

「ありがとうございませと伝えてね。」

と言っていました。祖父を心配してくれて遠くからたくさんの人
がおみまいに来てくれます。でも祖父は、

「一番身近な友達しか来てほしくない。」

と言っていますが、わたしは、心の中では本当は、おみまいに
来てくれてとってもうれしいし、感謝していると思います。でも、
体がしんどくて会いたくないのかなと思うと、とても心配です。

ある日、学校から帰ってくると色紙に「命」と書いてありま
した。祖母に

「なんで『命』って書いてあるの？」

とききました。祖母は、

「おじいちゃんが今、一番ほしい物だって。」

と言っていました。わたしは、これを聞いて泣きそうになりまし
た。祖父の「生きたい」という気持ちがすごく伝わってきたし、
わたしも「祖父にずっと生きていてほしい」という気持ちが、今
までよりもっと強くなりました。

三月十一日におこった東日本大しん災ではたくさんの命が一し
ゆんにしてうばわれてしまいました。しん災でなくなった人達も
もっともつと生きたかったと思います。祖父が病気になるって、命
のつながりについて考えさせられました。祖父、祖母がいて、父、
母がいて、わたしや妹がいるのは、すごい事なんだなあとと思いま
した。そして、この命を大切にしたいと思っています。
わたしと妹と祖母は今、祖父の病気が治るように千羽づるを作
っています。祖父が元気になって、またバスの運転手にもどつて
ほしいという気持ちをこめて一羽ずつ折っています。おじいちゃ
んにとつて今一番ほしい「命」、わたしにとつて大切な「命」、み
んなにとつてただ一つの「命」を大切にしていきたいと思ひます。

自分を見つめて・・・

(小学五年生)

ある日、いとこと買い物に行きました。何を買おうかと相談して、おかし売り場に行くことにしました。おかし売り場に行くと、車いすのついている人がおかしをさがしていました。近くまで来ると、車いすのついている人はよだれをたらしていました。私はそのすがたを見て、

「いややな。向こういこつ。」

と言つてしまいました。いとこも

「もうあのスパーパーに行きたくない。」

と言つていました。

家に帰り、スパーパーで見た人のことをいとこと話していました。

「あんな人が家族やつたらいややわ。」

「その気持ち分かるわ。」

と二人で話していました。けれど、不思議に思えてきたことがありました。それは、学校の「のびのび学級」の子には何も思わないのに、一歩外にでると、しょうがいのある人たちをそんな目でみてしまう私がいるということです。私は、他のお店へ行った時も、しょうがいのある人がさわった物や、歩いた所などをなぜかよけていました。なぜなんだろうと考えているうちに、弟のことを思い出しました。弟は、四年生だけれど、あまり勉強が得意な方ではありません。だから、今まで、「アホ」「バカ」とか言われていじめられたことがありません。弟は得意ではないけれど、勉強をがんばってやって

います。そんな弟のことを考えると、とてもくやしき気持ちになりました。そして、車いすに乗っていた人もきつといつしょうけん命生きているのじゃないかなと思うようになりました。もし、私の家族にスパーパーで出会ったような人がいたら、スパーパーでしたようなことはしなかったと思います。でも、今まで自分がしてきたことを思い出すと、だんだん心がさみしくなってきました。私は、いとこに自分の考えたことを話しました。いとこは、

「自分がしょうがいのある人だったら、そんなこと言われてやっぱりいややいな。」

と、私の考えたことをわかってくれました。それから、二人でこれからのことを話し合いました。そして、もし、しょうがいのある人に出会ったら、私たちにできることがあればやってみるということをしつしよに決めました。そして私のように、しょうがいのある人に対するいやな言葉を言っている友達がいいたら注意しようと思いに決めました。

他の人から、この人はかわいいから仲間に入るとか、この人はしょうがいがあるからダメだなんて決めるのは、おかしいと思います。

私の人権ポスターには、「いじめをなくして幸せのトビラをひらこう。」とかきました。これからは、自分を見直して人とのつながりを大切にしたいです。そして、世界中の人々が、みんな笑顔になって幸せのトビラがひらいたらなあと思っています。

ぼくにできること

(小学五年生)

ぼくは五年の始めのころは、一人でいることが多かったです。

声をかけようと思っても勇気が出なかったからです。でも、Hくんととなりの席になってから、話をするようになり、いっしょに遊ぶようになりました。H君のいいところは、だれにでも積極的に話しかけているところです。サッカーで、シユートが決まったときは、一緒に喜んでくれます。けがをしたら心配してくれれます。H君と仲良くなってから、友達が増えてきて、外でよく遊ぶようになりました。

でも、たまに、「あれ、これってだめなことなんじゃないのかな。」と思うことがあります。

例えば、ある子が反則してもだめだと分かっているのに何も言わず、違う子が反則すると、

「反則した。悪っ。」

などと、言うことです。ある子が反則しても何も言わないのに、違う子がするときつく言うなんて、差別しているんじゃないかなと思います。他にも、

「あの子、はつきり言うてつとつとおしい。」

などという声や、聞こえてくることがあります。そういうとき、いけないと分かっているのにそのまま注意せず、聞いているだけ、見ているだけの自分がいます。注意しようとするけれど、

今度は自分がそんなことを言われるんじゃないかと、こわくなって注意ができなくなります。

でも、それぐらいで、こわくなったらだめだと思います。注意しなかったら、もっと傷つく人が出るのは分かっています。だから、自分は悪口等をいわないようにしています。でも、注意ができないのが、本当にきついです。したくてもできない。したら、今度は自分が言われるかもしれない。でも注意しなかったら、ますます人が傷つく。だから、いつも迷っています。

傷ついて、ずっと一人でいる人がいたら、こつちも悲しいと思う人はいっぱいいると思います。そこで、一人でいる子には、「遊ぼ。」と、声をかけるようにしています。まずは、できることから始めて傷つく人をなくしていきたいです。今は、友達と協力できることを増やしています。勉強で教え合うときは、答えだけ教えるのではなく、「ここは、こつちやってやるんだよ。」と、相手に分かるように説明するようにしています。また、友達がノートを配っていたら手伝うようにしています。他には、注意するときは、きつく言うと言め合いになってしまっているので、優しく言うようにしています。すると、聞いてくれる人もいますので、少しずつ注意ができるようになってきました。

今の自分は、前より人の気もちを理解し、考えて人と接することができるようになってきたと思います。これからは、しっかり相手の立場を考え、助け合いをして、まだ友達になっていない人も仲良くしてきずなを深めていきたいです。

もう絶対にしない

(小学六年生)

私は、大切な友だちを傷つけてしまいました。二人で一人をたたいたり、髪の毛をひっぱったりしていました。

今、私は、いじめていたことを後悔しています。友だちは、「やめて。」

と言っていたのに、なんでやめることができなかったのだろう。と、今、思っています。だけど、その時の自分は、自分の思い通りにいなくて、腹が立っていて、自分のことしか考えることができない私でした。そんな私が、友だちを悲しませていたことに気づいたのは、先生や家の人、友だちと話し合いをしていた時です。その話し合いのなかで、友だちが、いやな気持ちでいたけど、何も言えずに耐えていたことや、言いたかったけど、

「もっときらわれたらどうしよう。」

と思っ言えずにいたということを知りました。私は、そんな風に思わせていた自分にショックを受けました。友だちに

「もう遊びたくない。」

と言われると思っ覚悟をしました。すると、その時、友だち

から出た言葉は、

「もう、いやなことがなくなれば、これからも一緒にいたい。」
と言う言葉でした。私は、その言葉を聞いて、心がふるえて涙が出てきました。

「自分は何をしていたのだろう。」

という悔しさと、あんなひどいことをしたのに、

「友だちでいたい。」

と言ってくれたことがうれしくて、心がぐちゃぐちゃになってしまいました。自分も何か言わなければとは思っていたけれど、言葉がつかまって、何て言ったら良いのかわかりませんでした。けれど、

「もう、絶対にしない。」

と、心の中にいる自分に約束をしたことは、はっきりと覚えています。

これからは、友だちと楽しい思いで、いっぱい毎日を通したいと思いました。そんな毎日を過ごすには、今の私では、きつと友だちは心から楽しいと思ってくれません。友だちを平気で傷つけたままの私ではいたくありません。

「私は変わりたい。」

この思いが、話し合いのなかで、何度も何度もこみ上げてきま

した。友だちが困っていたら相談してもらえ自分になりたい。そして友だちの笑顔をいつも見ていたいと思いました。それは、その子にだけではなくて、みんなにそんな風になれる自分になりたいです。そのためには、どうすればいいのか考えました。悪口を言ったり人をたたいたりすることをやめました。自分は少し前の自分よりは変わることが出来ているのかなと思いましたが、けれど、今の自分に満足は出来ていません。今、どうすれば、変わるのか、いつも悩んでいます。それでも、友だちが言ってくれた

「これからも一緒にいたい。」

その気持ちに応えたいです。

「一緒にいてよかった。」

と思ってもらえる自分になりたいです。

私は、卒業までに、人を大切にできる自分になります。そして、卒業しても、大人になっても、心に決めたことを実行します。

「友だちを悲しませる自分にはならない。友だちを笑顔にできる自分になる。」

それが、今の私の決意です。

「違い」を認め合うこと

(中学一年生)

私は、静岡県で生まれました。私の母が、静岡県の出身で、里帰り出産を選んだためです。生まれて一カ月して、奈良の家に戻り、それから小学校四年生まで、奈良で育ちました。

母は家で、関西弁を使わないので、その影響で、私は普段、標準語で話します。私たちにとってはあたりまえのことが、ほかの人たちにとっては「何か違う」と感じることもあるかもしれません。

小学校に入学して、生活の範囲が広がると、一部の人から、「言葉の発音がおかしい。」などと言われるようになりました。私は、学童保育に通っていたので、年上の人からも、言われました。かなりしつこく言われ続けたので、とても傷ついたり、自分でも気にするようになりました。でも、長い間ずっと標準語で話していたから、直そうとしても、なかなか直らなくて、困りました。

母は、私がいじめられていると思い、言われたら関西弁で言い返すようにと言って、私に関西弁で話す練習までさせました。私はどうしても、それを素直に言うことができませんでした。

その頃はまだ小学一年生だったので、なぜ言えなかったのかはわからなかったのですが、今思うと、自分は何も悪くないのに、話す言葉を変えなければならぬのはおかしい、と思っていたのかもしれない。

実際、ほとんど関わりのない上級生の人から、休み時間などに言われたこともあり、「私が、何か迷惑をかけたのかなあ？何でこんなに、何度も何度も言われるのかなあ。」と、ずっと悩んでいました。

人は「違い」に敏感なんだと強く思います。私の言葉が関西弁ではないので、もしかしたら、聞いている人はきつく感じることもあるかもしれません。でも、直接誰かに迷惑をかけるようなことがあったとは思えません。

私の話し方や言葉が自分と「違う」ということが、気になるのだと思います。

でも、それが気になるからといって、悪意をもって言い続けるのはよくないことだと思います。いじめにつながっていく可能性が十分にあるからです。私の場合、いじめには至らなかったのですが、いやな思いを何度もしたのは事実です。きっとそのときに、互いに「違う」「ことを認め合う気持ちがあれば、いやな思いをすることを避けられたかもしれません。

人は、一人一人違った個性を持っています。だからこそ、お互いに刺激を受けたり、弱いところをカバーし合うことによって、成長することができると思います。

私自身、小学五年生のときに、奈良県から三重県に引っ越すことによって、自分の世界が大きく広がりました。最初のころは、なかなか学校になじめませんでした。関西弁を話していても、指摘されることがほとんどなので、気持ちは以前より安定してきました。これまでの、いろいろな経験から自分でも知らないうちに、人に対して、自分から心を開くことができないうちのかもしれない。

一年が過ぎ、六年生になってから、私のことを理解してくれる友達に出会うことができました。お互いのよいところも悪いところも、きちんとわかり合える、そんな仲間です。今では、小さなことでよくよ悩むこともなくなり、少しずつ自分に自信がでてきたように思います。

私は、自分自身がつらい経験をしたことで、弱い立場の人の気持ちができるようになったと、今では思います。きっと、「差別」も、このような小さなきっかけから始まるのかもしれない。差別をなくすためには、私たち一人一人が、互いに「違い」を認め合うことが大切だと思います。それは、そんなに難しい

ことではありません。少しの想像力を働かせて、相手の立場に立って物事を見るだけなのです。私は、そのことを多くの人に知ってもらいたいと思います。そして、誰もが安心して過ごすことができる社会が実現することを強く願っています。

膝サポーターが教えてくれたこと

(中学三年生)

痛い！膝に言い表せない激痛が走りました。心配した友達が私に駆け寄ってきました。友達は言いました。

「大変！安里ちゃんの膝が四角形になっているよ。」
と、身動きが取れない私の上に、多くの顔が集まってくるのがぼやけて見えました。そして、遠くから救急車のサイレンが聞こえてきました。

私は二年生の時、テニスの部活中に膝がはずれて骨が欠けるといふ大怪我をしました。二ヶ月間は松葉杖で、その後は膝サポーターを毎日つけて生活し、一年間リハビリにも通いました。この怪我をするまでは、元気に学校へ通っていることは当たり前のように思っていたけれど、それは決して当たり前ではないのだと、この時初めて気付かされるのがたくさんありました。

私生活の中では着替えやお風呂などに時間がかかり、靴を履くにも不便を感じましたし、階段を一段上るのもすごく大変でした。そういう状態だったので特に松葉杖をつけていた間、色々な人に助けられました。通学では母が毎日学校まで車で送り迎えをしてくれたり、学校では階段の上り下りに友達がカバンを持

ってくれたり、当番を代わりにやってくれたり、塾では先生が松葉杖のつき方をアドバイスしてくれました。今でも、その時のことを思うと人の気遣い、優しさに本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

また、怪我をしている時、今まで見えなかったことが、日常生活の上で見えてきたのです。学校・スーパーなどの公共の場所においてもいつも「エレベーター・エスカレーター」の場所はどこか「階段や廊下の手すりの有無は」「トイレの種類（和洋式）」手すりの有無は「車の乗り降りのステップや手すりは」など、手すりなどの設備が結構意識していないところにあったり、そういう立場でないと気にも留めてないことがすごく分かりました。また、自宅の玄関やトイレ、お風呂、階段に手すりがありバリアフリーということには分かっていたつもりでしたが、有難く思えたのは初めてでした。

私は今、運動をする時以外は膝のサポーターもはずれ、元の生活に戻っていますが、人への気遣いや別の視点で物事を見る習慣を続けていきたいと思っています。

例えば、視覚障害者の方々の為の設備についてです。その代表的なものに誘導用点字ブロックというものがあります。点字ブロックとは、視覚障害者の方が白杖でこれを見つけ、その上を歩いて行

けば歩道を進めるようにと出来たものです。しかしよくある問題が、点字ブロックの上に自転車などを平気で駐輪している人がいるということ。これだと視覚障害者の人の妨げになり、ぶつかって怪我をしまうかもしれません。頭の中では、点字ブロックは視覚障害者の為にあるということは大半の人は分かっている、その上に無意識に自転車などを置くことによって迷惑をかけています。つまり、いくら点字ブロックがあつたとしても、私達がそれを意識しないといけないということです。そのような事柄を人権という面で考えてみると、視覚障害者が点字ブロックを自由に歩けないということは、視覚障害者の人権を侵害しているということになるのではないのでしょうか。

では、次の場合はどうでしょう。これは、私が小学六年生の時の話です。隣の家の人が茶道を習っていて、子供達にも茶道を知ってもらおうというイベントがあり、何人か一緒に老人ホームへお茶を点てに行った時のことです。私は茶道そのものが初体験で、老人ホームも行った事が無いし、とても緊張していました。そして、お年寄りの方に慣れない手付きでお茶を点てていると、一人の車いすの方が私の列に並んで来られました。私は他の方と変わりなくお茶を点てましたが、お茶を渡す時どうしてよいか分からず、その方に直接渡さず、近くに置いてそのままにしてしま

いました。そして結局、職員の方が気付き、車いすの方にお茶を渡して下さいました。すると車いすに乗っておられた方が、寂しそうな顔をされたような気がしました。それを見て私は、その方は出来るだけ自分で受け取りたかつたんだなと思いました。私は、その方を知らない間に傷つけてしまったと後悔しました。私の思い込みかもしれませんが、今でも私の中では、その時の光景が鮮明に残っています。私がもう少し、気が付いて渡してあげていればよかったです。善意であっても、思わぬことから人権の侵害となつて人を傷つけてしまっていることもよくあると言われます。そういうことを恐れず、相手の立場で考えて行動することが一番大切なのかもしれません。私はこれらの経験で、人の思いやる心の大切さ、初めて人権というものを身近に感じたような気がしました。

そして、「膝サポーターの日焼けあと」が私を一回り大きくしたように思えました。

「知る」ということ

(高等学校三年生)

3月11日、東日本大震災が発生し、多くの人の命が奪われました。テレビの映像を見て、私は言葉を失いました。人々が、車や船が、そして家までもが、あっけなく津波で流されてしまっていました。死者・行方不明者が次々と増え、募金活動が各地で活発に行われ、いつものテレビ番組は地震に関する情報番組へ相次いで変更されました。しかし私は、その張りつめた状況がいつ終わってしまうのかと思うと不安でした。今はしっかり注目していても、日に日に人々の意識が薄くなっていってしまうのではないかと思っていました。「自分に来ることがあれば、力になりたい」と多くの人が思ったことでしょう。私も募金をした後も、他に何かできることはないかと悩みました。

そんな時は、誰にでもできることに気付きました。それは、「知る」ということです。そう気付かせてくれたのは、戦場カメラマンの渡部陽一さんです。私は渡部さんの講演をお聴きする機会がありました。渡部さんは講演の中で、「こう語られませんでした。

「どうすれば戦争を防ぐことができるのでしょうか。それは、相

手のことを知ること、なんです。私はこの言葉を聞いた時、「そうか!」と思いました。そして、相手のことを知ることが人と人をつなぐのなら、それは、ほんの少し相手を思いやる心を持つてば、誰にとっても難しいことではないと気付きました。私はこれまで、色々な人権問題について考えてきました。そしてそれは、どれも「知る」ことから始まっていたことに気付きました。そこで私は、東日本大震災に関する番組が少しずつテレビから消えていっても、自分で常にアンテナを張り、自分から情報を掴みにいくことに努めようと思いました。今自分にできることは、しっかりと受身でない受信者になることだと思ったからです。

私は、被災地の人々の想いを知ることから始めようと思いましたが、新聞に注目してみると、死亡者数と行方不明者の数が書かれていました。テレビでは、今もわが子や親族が見つからず、それでも帰りを待つと語る人々の姿がありました。その数を日々新聞で読むたびに胸が苦しくなりましたが、私はその行方不明者の数が、少しずつ減ってきていることに気付きました。それは、私の心をあたたくさせるものでした。たとえば、その減少した数が死亡者数に変わってしまったのだとしても、とにかく見つかった、あるいは死を受け入れた人がいたということ、そして今も諦めずに誰かを探してくれている人々がいてくれることが嬉しくなりま

した。探し続けることは、仕事柄当たり前のことなのかもしれません。でも私は、その当たり前が非常に嬉しかったのです。

「知る」ことは、目に見える支援ではないかもしれませんが、しかしそれは、決して無駄ではないと思えました。相手の想いを知るといふことは、相手を思いやることなのです。単なる同情ではなく、相手の心に耳を傾けることは、人権において非常に大切なことだと言えると思います。

また、私は写真部の活動を通して、被災地に応援メッセージを届けるプロジェクトに参加しました。それは、学校内あるいは地域の人に声をかけ、スケッチブックに被災地へのメッセージを書いてもらい、それを手に持った状態で写真を撮らせていただくというものです。写真は主催校を通して被災地を回り、展示されま

す。初めは、快く協力してくれる人がいるか緊張しましたが、頼んでみると笑顔で「いいですよ」と言ってくれる人たちばかりで、私はここでも人のあたたかさを改めて感じました。被災地の方は写真を見て、「私達も頑張らなくちゃね」と前向きに励まされていたと聞いた時は、本当にうれしかったです。逆に私が元気をも

らったように感じました。

相手の想いを「知る」ことが、自分の想いを「伝える」ことにつながった時、人は人のあたたかさに気づくことができる

と思います。渡部さんが話された、「相手を知る」ことで戦争をなくすることができるということは、きっと事実だと思います。世の中には、様々な人権問題があります。しかしそれらも、すぐ真正面からなくそうとするのではなく、まず「知る」ことから始めることが重要だと思います。そしてそうすることが人の輪を広げ、解決につながるのだと思います。私は最初、東日本大震災の様子を見て、あのような状況の前で人はあまりに無力だと感じました。しかし全くそうではありません。人々は思いやる心やあたたかさ、そして諦めない強さを持っています。「知る」ことが私に気付かせてくれたその大切さをこれからも忘れずに、色々なことに関心を向けていこうと思います。

人権

(高等専門学校一年生)

僕には、体に障害を持つ祖父がいます。かなりの大酒飲みで、酔っ払って暴れ出すと大変なことになりますが、子供や孫にはとつても優しい、魚釣りの大好きな祖父でした。小さい頃から僕も姉も、祖父のことが好きでした。そんな祖父が病気で倒れたのは、僕が六歳の頃でした。お酒好きだった祖父は、脳内出血という病気で突然倒れてしまいました。すぐに病院に運ばれ手術した結果、命は助かりましたが、右半身が麻痺し、左半分の体で生活しなければならなくなっていました。それ以来祖父は、自分の口から言葉を発することができなくなりました。

それから僕と姉が祖父にしてあげた事は車椅子を押すことでした。はつきりとは覚えてませんが、ある日、母が僕を叱ったことがあります。僕は「祖父が車椅子に乗っていて、買い物に行くとき周りの人達がじろじろ見るから嫌だなあ。」と思います。その時、車椅子を押すこと、一緒にいてあげてくれることを渋っていました。すぐに母は注意してくれました。家でも真剣に話してくれ、僕も十分反省しました。しかしそれでも、僕の気

持ちは二つに分かれました。一つは、母の話を素直に受け止め、嫌がる必要なんてない。祖父に誇りを持てるのだ。」という気持ち。そしてもう一つは、「やっぱり、周りの人の視線が気になる。」という気持ちでした。この二つの気持は長い間ずっと私の心の中で現れては消え現れては消えて、そうやってずっと考えていました。

そんな僕が変わったのは、中学一年生の夏休みでした。僕の家族、祖父、祖母とで旅行に出かけたのです。祖父の車椅子を押し始めました。そこには、嫌な表情一つ見せない、澄み切った素直な良い顔で祖父に話しかける姉の姿がありました。僕はびっくりしました。姉は勉強嫌いで毎日のように両親と喧嘩をしていたのです。でも、姉の素直な心は、僕よりもずっと強くて大きかったです。そしてその時から、僕は素直な心で、祖父と向き合うことができるようになったのです。祖父の喜ぶ笑顔も祖父自身も、僕は好きになりました。

どんなに体が不自由で、車椅子に乗ったり寝たきりだとしても、人は尊敬され大切にされるべき一人の存在なんだと、僕は思えるようになりました。

標語

〈小学生の部〉

- 「ありがとう。」 そのひとことが みんなを笑顔にする (五年生)
- だいじょうぶ？ふわふわことばうれしいな (五年生)
- きずつける 何気ない一言 考えて (五年生)
- つないだ手 伝わってくる めくもりが (五年生)
- 大丈夫 一人じゃないよ みんないる (五年生)
- ありがとう 笑顔になれる 合言葉 (五年生)
- どうしたん そんな言葉が きず薬 (五年生)
- だいじょうぶ その一言が うれしいよ (六年生)
- ありがとう 心やすらぐ その言葉 (六年生)
- 「ありがとう」 そこから始まる 仲間の絆 (六年生)

〈中学生の部〉

- なにげない ことばに宿る 差別心 (一年生)
- あいさつは 心をつなぐ メッセージ (二年生)
- あいさつで 心のドアを ノックして (三年生)
- 「一人じゃない。」 僕を救ったその言葉 (三年生)
- あなたの一言 笑顔と涙の 分かれ道 (三年生)

〈高校生・高等専門学校生・一般の部〉

- やめておこう 私がされたら いやなこと (高校一年生)
- 育てよう 人に優しく する勇氣 (高校一年生)
- 無くそつよ 差別という名の 境界線 (高校一年生)
- 育てよう 信じる心と 認める心 (高校三年生)



タイトル：いつまでも

コメント：祖母が祖父のシャツのボタンをとめているところです。
いつまでも仲良く、これからも元気な二人でいてね。



タイトル：団結の力

コメント：円陣はモチベーションが上がるだけでなく、チーム力、
仲間との絆を深めてくれます。



タイトル：大切な仲間

コメント：どんな時でも一人じゃなくて、みんなと過ごす
一瞬一瞬がとても大切に幸せ。



タイトル：魅！！

コメント：ダンスコンテストへ出場しました。
優勝したので今度東京へ行きます。
みんな笑顔で踊っていてとても思い出深いです。



タイトル：二人の世界

コメント：孫の運動会のワンシーンです。演技が終わった年少児を「よく頑張ったネ。」と笑顔で抱きしめるママ。満足そうな子どもの姿にほのぼのとした雰囲気を感じ、撮りました。



人権作品集

2012年2月発行

名 張 市

名張市教育委員会

この冊子は再生紙を使用しています。